

シカゴ学派の展開

ーイデオロギー的背景との関連でみた初期シカゴ学派の成衰ー

玉井真理子（大阪大学大学院）

はじめに

学問領域においていかなる方法が重要とされるのかという問題は、イデオロギーと無関係ではない。ある科学的方法が優れているとみなされ、その科学的方法がかえりみられなくなり、また再び脚光を浴びるようになるのはいったいなぜなのであろうか。このような事象が歴史上、とりわけ明白にみられたのはアメリカの社会学においてである。

シカゴ学派は 19 世紀末に社会学をアメリカで初めて制度化し、社会学的方法を洗練させ、アメリカの社会学における支配的な地位を築きあげた。にもかかわらず、その名声は過去のものとなり、一時はこの学派が主として用いてきた方法がほとんど無視され、それと時を同じくして、方法論的には全く異なる、抽象化や概念化を重んずる構造機能主義がアメリカ社会学の首座についた。しかしその後まもなくシカゴ学派が再評価されるにいたる。ではその理由はなんであったのだろうか。本発表では特に初期シカゴ学派に注目し、その成立から衰退までの背後に存在する要因をアメリカの歴史のうねりのなかでとらえ、とりわけそこにひそむイデオロギー的背景をさぐることを目的とする。

シカゴ学派の特徴

シカゴ学派の社会学的方法の主たる特徴は、市井の人々の視座に接近し、社会の内部から社会的現実を明らかにしようとするものであった。そのために一方ではフィールドワークによる観察を重視し、また資料としては生活史、手紙、手記などを用いながら、個人の視座に映る社会の現実を明らかにしつつ、他方ではその個人が置かれた状況を、統計や地図などを用いて社会全体の中に位置づけた。そして時には社会の周縁に位置づく人々の「主観」的現実が重視された。アメリカの急激な都市化の時代にあって、市井の人々にとっての社会変動の現実はいかなるものであるのか、ここにより重点をおいたのがシカゴ学派の社会学的方法である。さらにシカゴ学派の社会学者たちのなかには、単に都市化が個人にもたらす問題とは何である

のかを明らかにするのみならず、その解決に必要なプログラムを立ち上げようとする者も少なからずいた。例えば浮浪者、非行少年を初めとする都市生活の「不適応者」がおり、なんらかの対策が急務とされていたのであるが、シカゴ大学の主たる社会学者はそうした問題を解決しようとした。その立場から研究をすすめた人物として、スモール、バージェス、ショウらの名を挙げることができる。

一方構造機能主義は、現場から距離をおいた「客観」を重視した。しかし個人の主観を全く無視してもつばら「客観」的であることへの傾倒を科学の本質であるとする主張は、その「客観」がある限られた社会集団の特殊な利害から発生したものであるとか、その特殊な利害の利に浴するものだということを隠蔽している。このことは、当時ほとんど認識されることはなかった。現に存在するものは、結果として必然的に機能しているのであるとする構造機能主義は、必然的に貧困をはじめとする社会問題を黙認する。それは「現」体制の肯定に他ならない。

シカゴ学派と構造機能主義とは、前者が社会変革を視野に入れているのに対し、後者は変革よりむしろ、社会の存続が有用性を意味するところを探し出そうとする点に違いがある。

シカゴ学派の成立

シカゴ大学社会学部はシカゴ大学創立と同時に 1892 年、スモールを学部長としてスタートした。創立の第一歩から、この社会学部は第一級の教育機関として成立し、高く評価されたのだが、それはいったい何故なのだろうか。ここでは歴史的背景を指摘しておく。

当時のアメリカは急激な産業化に伴い、生活様式やそれを支える価値観の転換および、移民の大量流入による人口構成の変化を同時に経験した。農村社会を形成していたアメリカ生まれのアメリカ人のなかでも都市化が進んだ地域に住んでいた人々は、伝統的なプロテスタンティズムに培われた慣習やモラル、人と人との紐帯で成立していた地域共同体の崩壊に直面したのである。なかでも道

徳的退廃は顕著であった。こうした危機や墮落を憂慮する感情が、社会改革活動の指導者を求めた。その役割を担ったのが、宗教を背景にもつ社会学者たちであった。例えばシカゴ学派第一世代のスモールはプロテスタントの牧師であったし、ヘンダーソンにも牧師の経験があり、トーマスは牧師の息子であった。シカゴ学派の社会学者は、草創期より社会改革に対する強い使命感を持ち、シカゴに生じたスラム化などの問題に対して、社会学という学問を深めることにより、変動する社会に適応するための新しい知識を蓄積することで対処しようとしたのである。スモールとヴィンセントは彼らの共著テキストで次のように述べた。「社会学は、社会を改良しようとする近代の意気込みから生まれたのである」。

シカゴ学派の興隆

こうした状況のもとでシカゴ学派は、その第一世代より、書斎での理論化よりも実際の調査研究を推奨し、またシカゴを調査活動の対象とした。社会改革には現実を正しく把握する必要があったのである。第二世代を代表するパークとバージェスは、より一層「科学」としての社会学を意識するようになったが、都市の現実を社会の内部からとらえようとしたことには変わりなかった。「信頼できる社会学の方法は、観察と帰納の方法でなければならない」とスモールがヴィンセントと共に力強く述べた学問上の調査スタイルは、第二世代を通じて第三世代にも継承されている。パークとバージェスの『グリーンバイブル』をみると、彼らがスモールらと同じく観察と帰納の方法の重要性を述べていることがわかる。「社会学を専攻する学生にとってまず第一に必要なことは、自らの観察したことをよく吟味し、記録することである。目にしているものを良く読み、その後、核心となる資料を選択し、記録することである。それは結局のところ、みずからの経験を利用し、体系化するというにほかならない」。シカゴ学派の方法論は『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』、『ホボ』、『ジャック・ローラー』、『ギャング』を初めとする数多くのモノグラフの業績に結実した。その一方で、同心円理論などの理論的蓄積もなされたが、こうした成果は社会改革を求める熱意から生まれた。

シカゴ学派の衰退

だがやがてアメリカにおける社会改革の勢力が衰え、社会の全体レベルの「秩序の問題」が浮上することによって、シカゴスタ

イルと呼ばれた社会調査は注目されなくなる。すでに第一次大戦後のアメリカには愛国主義的な空気が強まり、それまでの理想主義的な改革の時代から保守的な時代になりつつあったが、アメリカにおける社会調査のあり方に転換がもたらされたのは、大恐慌が大きな契機となったとみてよいであろう。第二世代のボーガダスが「政治は戦争の代用品である」といったことを援用し、清水幾太郎は「社会調査は政治の代用品」であると述べている。19世紀末から第一次大戦までの「政治」はアメリカ市民のポリティクスであったが、アメリカの経済的繁栄の時代に官僚組織が創設され拡大すると、「政治」は政府や官僚組織のポリティクスへと変化した。

こうした時代の流れを受け、社会の「秩序」維持に傾倒する理論や、量的にも事例よりは対象を拡大して州レベルの、あるいは国民レベルの一般的傾向を把握する調査が社会学の主流となった。しかしシカゴ大学で学ぶ社会学者たちの一部は、シカゴスタイルの伝統をその後も受け継ぎ、事例調査を通じた具体的社会のリアリティに立脚する研究を行ってきた。第三世代で第二次大戦後に「シカゴスタイル」を継承した要となる人物は、ワース、ヒューズ、ブルーマーであった。

おわりに

誰のためのそしてなんのための〈知〉か—このことによってこそ、いかなる方法が適切とされるか決まるのである。

すでにみたように、シカゴ学派が発足した当初から大恐慌までの都市化の時代には、急激な社会変動とそれがもたらす社会問題に、アメリカ市民が対応するための〈知〉を探究することが求められた。当時は彼/彼女らが支配的階層の位置を占めており、したがってそのニーズに合致した研究対象や調査法を主として用いていたシカゴ学派は、多くの業績を産出することができたし、また社会学の世界においても支配的位置を占めることができた。だがアメリカにおける支配的階層が都市化の進展と共に変化し、とりわけ大恐慌という社会の混乱を経験すると、シカゴ学派が用いてきた研究スタイルとは全く異なる視座や方法が注目され、評価されるようになった。なぜなら今度は、政府や官僚組織が国民を統制するための〈知〉が求められるようになったからなのである。シカゴ学派が一時影をひそめるのは、学問上劣っていたからではなかった。このことは、60年代に公民権運動が盛んになり政府に対する国民の不信感が高まった時代に、シカゴ学派が再評価されるようになったことから明らかである。